

文化に対して広い受容性を持つ心だけは育てていって欲しい。大学においては、異文化コミュニケーションを通じて、多様性の中から自分とは違う価値観を知り、学んでいける環境を作り出す仕掛けが必要であろう。

2016年の一連の出来事から、これまでの社会や個人での大きな支配的価値観である従来のパラダイム、特に資本主義の役割に関しては、変革すべき時がきていると考える。ただし国家や政府の視点では、先人が培ってきた国際社会において、各国の協力と発展という基本命題を破棄してはならない。今から1世紀前、第一次世界大戦の教訓で国際連盟が設立された。その後、第二次世界大戦を経て各

国は再度、国際連合を設立した。加盟国の対話と協力こそが国際社会の持続ある発展の原点であることを確認したはずである。

今年の論調をみていると、国際社会全般の協力体制や全体利益という視点ではなく、自国中心の国益追及の機運が高まっているように見える。しかしグローバル化の影の本質を見誤ってはいけない。グローバル化を否定する保護主義や利己的なナショナリズムからは、決して自国の長期的な国益も得られない。拡大する地域社会の格差をどのように是正すべきか、そのためにできることや、為すべきことは何かが問われている。

(所員 経営学部教授)



学会報告

## リーンマネジメントに関する国際会議に参加をして

堀口 正之

今年度採択されたアジア研究センターでの共同研究「アジア地域におけるサプライチェーンリスクマネジメントに関する研究」(研究代表者:工学部中島健一先生)に関連して、2016年8月12日から14日に中国・北京にて開催された国際会議(ICMOR2016, International Conference on Management and Operations Research)に参加し、研究成果発表を行ってきた。この会議では、産業における意思決定の諸問題に対して、それぞれの研究者の専門分野からの解決のアプローチによる発表・議論がされた。この会議の大まかな様子としては、経済・経営および理工系に幅広くわたる具体的分析と理論研究に取り組む研究者がアジア各国から集い、オーストラリア、デンマーク、アメリカ、スペインの著名な研究者の基調講演や研究発表もあり、盛況に開催された。

私の研究テーマは、生産管理工程にも応用されるマルコフ決定モデルの数学理論としての基礎研究であり、たとえば自動車の生産ラインのような一つの完成品を作る工程での部品の供給と在庫管理の計画を行うことに応用される。需要の不確実さに対して、確率モデルを構成し、その確率モデル下での状態推移法則の推定をもとにした適応制御の理論的研究である。不確実な状況をモデル化する場合、確率論の立場によらない手法がいくつもあるが、そのうちの一つの不確実性理論の研究が中国国内では活発に取り組まれている。今回の国際会議へは、北京

理工大学のXiaoxia Huang教授に参加を御声がけいただいて出席した。Huang教授は、不確実性理論のもとでのポートフォリオ選択問題の著名研究者である。そもそもは、私の所属する研究グループが、日本国内で半世紀近くにわたり脈々と受け継がれてきている研究コミュニティであったことが幸いし、昨年、Huang教授に部会での講演をいただいたことの研究交流から、今回、北京での会議参加の機会を得た次第である。他分野にわたる先生方とのディスカッションを通じて新たな研究テーマとなる課題も見えてきた。

会議では、リーンマネジメント(生産管理)の視点から、新製品の開発、生産工程のメンテナンス、サービス分野での顧客満足度などの数理モデルの理論的解析や、環境問題に対する実際的な研究など、中国国内においても日本と同様にマネジメントサイエンスやオペレーションズ・リサーチの科学研究は理論と実際の両輪の研究で進められていることを改めて感じた。さらに、複合領域の側面も持つ研究分野でもあるため、それぞれの専門分野の融合による問題解決に取り組む必要がある。日本の誇る伝統的な生産管理における意思決定・問題解決手法が十分に活用される研究分野である。今回の北京での国際会議に参加して、世界の工場として今後10年での一層の発展の自負とともに、それと並行して、産業における第4の波のうねりをうまく乗り越えるべく、科学技術研究を推進していることが垣間見られた。また、産業や環境の問題に対して日本と類似した困難性に対処している状況の中で、日本がかつて経験してきた問題解決手法から得た知見なども踏まえ、アジア各国の状況に応じた新たなマネジメント手法の研究の必要性も実感した。

(理学部 教授)



研究発表の写真(堀口)



会場となった Beijing Friendship Hotel